

教育研究業績		
2025年 5月 1日		
氏名		神野 雄
研究分野	学位	
社会心理学	博士（学術）	
研究のキーワード		
嫉妬，恋愛関係，親密な人間関係，自己愛		
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
(1) グループワークの導入	2013年4月～現在に至る	心理学的専門用語の解説を行う際に，学生の身近な話題に関連づけたテーマについてグループワークを取り入れた。 具体的には，「集団でのごっこ遊びが幼稚園児だとケンカやトラブルにつながりやすいのはなぜ?」「赤ちゃんが可愛いのはなぜ?」「浮気をされると腹が立つのはなぜ?」「渋谷ハロウィンが大騒ぎになるのはなぜ?」等。授業者も各グループを巡回して議論の活性化や意見交換を行い，ワーク後には出揃った意見の総括および解説を行った。 成果として，学生が他者の考えを知る，学生間の親睦，授業内容の理解や授業の活性化につながっている。
(2) 映像資料の導入	2013年4月～現在に至る	授業内容の理解の促進のために，必要に応じて「恐怖条件づけ」など心理学的実験や，「産後うつ」「コロナ禍でのオンライン保育」「高齢者の性」「原始反射」「ADHD者の思考」など，現象に関するニュース等のビデオ，DVD，動画による映像資料を講義時間中に用いた。また映像資料に対応した授業資料を作成し用いた。その後映像資料でも説明が不十分だった箇所や理解しづらい箇所について授業者自身が説明を補った。 成果として，授業内容の理解の促進，授業の活性化につながっている。
(3) 小レポートの活用	2013年4月～現在に至る	毎回，授業時間最後の5～15分，ないし事後学修として各講義に関してテーマを与え，小レポートとして提出させた。小レポートは内容の正誤ではなく，講義への取り組みの真摯さを評価し，授業の評価に加算するものである。またこの小レポートに記述された内容は次回の授業の冒頭でその幾つかの内容を匿名で紹介し，様々に異なる意見や優れた意見を取り上げる。これらの意見を統合して授業者が前回の授業内容を振り返り，今回の授業内容とのつながりに触れてから講義内容に取り組む形式を取る。 成果として，学生自身が授業の理解度を振り返る機会となり，また授業者自身が学生の理解度を測り次回以降の授業の仕方を考える重要な材料を得ることにつながっている。
(4) 前回の意見・感想・質問への回答および興味関心の質問への回答	2013年4月～現在に至る	上記の小レポートとともに毎回の授業に対する感想や不十分な点および発展的な質問を許可しており，小レポート用紙に専用の自由欄を設け，次回それに回答することで，双方向的な授業進行を目指した。さらにこの欄には毎回の講義内容に関連する内容に限らず，心理学的・人間関係に関する話題で学生個人が気になること・授業者に質問したいことを書くことも許可した。 成果として，まず講義内容について不十分な点の確認や授業の進行の仕方等について学生の視点から問題がないかを授業者が客観的な視点で確認することができた。またその他の素朴な疑問への回答を行うことで，授業内容のみにとらわれない学生の心理学への興味・理解の促進に努め，学生との信頼関係の構築にも多大に貢献した。
(5) 心理尺度の活用による講義内容の理解促進	2013年4月～現在に至る	学生の講義内容への理解の向上や，講義内容への関心の向上を図るために，折に触れて実際の心理学領域で用いられている学術的な心理尺度を必要に応じて短縮して学生に回答させる時間を取った。回答内容や具体的な得点などについては開示しなくて良い旨を伝えた上で，回答した感想を言い合う時間を設けることもあった。 成果として，学生にとって自らにも当てはまる部分のある概念として，授業で扱った心理学的用語に対する理解の促進に寄与した。

(6) 資格試験の過去問の活用	2014年10月～2017年3月	大阪医療福祉専門学校視能訓練士学科昼間部一年制コースの非常勤講師として講義科目「臨床心理学」において実践した。本講義においては講義内容を解説した後に、実際に過去の国家試験においてはどのような形式で問題が出されていたかということを折に触れて取り扱った。この際、誤答として用意されていた選択肢についても、それぞれの意味や使用される領域について解説することで、同様の問題が出た際に広く対応できるよう、配慮を行った。成果として、資格試験に対応した知識の定着につながった。
(7) 国家試験用の知識以外の臨床的な知見の活用	2014年10月～2017年3月	大阪医療福祉専門学校視能訓練士学科昼間部一年制コースの非常勤講師として講義科目「臨床心理学」において実践した。資格試験用のテキストの記述と臨床的な知見や当該領域における最新の論文の記述とが必ずしも整合しない場合が存在する。本講義内容においてもそういった部分は散見され、授業者が資格試験用の教科書に沿った知識と併せて複数の論文や医療サイトの知見を紹介することで、資格試験に対応した知識と、現場での医療に関わる知識の統合的な学習を目指した。成果として、資格試験の合格の先を見据えた実際の知識の定着につながった。
(8) 発展的・示唆的な質問の活用	2014年10月～現在に至る	小レポートのテーマとして、時々講義内容に対して「良い質問をして下さい」と発展的・示唆的な質問をするよう教示した。自分の理解度と区別した場合に考えられる疑問点や自分の経験に照らし合わせて気になることを授業者に質問させ、答える意味のない質問や感想は書かないようにという形式で回答を求めた。さらに、次の授業の冒頭で全ての学生から得た匿名の「良い質問」に対する返答や学問的知識をまとめた「良い返事」資料を配布し、興味や必要に応じて閲覧するよう伝えることもあった。成果として、この教示を与えるテーマについて学生たちと議論する良い材料となり、授業者の方でも学生側の考えを知り、自らの学識の幅を広げる良い機会となった。
(9) 学生による授業評価の活用	2014年10月～現在に至る	講義の最終回での小レポートのテーマを、最終回の授業内容への感想以外に授業全体への感想や最も印象的だった授業内容についての意見、より良い授業への意見等を含め記入するよう求めた。成果として、学生から得た授業全体に対するフィードバックを得ることで、多く回答が得られた改善案などを見出すことで次年度の資料の改善や授業内容の再考につなげることができ、結果として次年度以降のスムーズでより良い講義の実践につながったと考えられる。
(10) 学生による授業発表の活用	2017年10月～現在に至る	講義時間中に授業者の与えたテーマに沿った発表テーマをグループで考案させた。学生は講義時間中、および課外時間に文献やインターネットを活用して、全体で20分ほどの発表時間を使って一つのテーマについて発表を行い、さらに他の学生たちから質疑応答を受け、それに対して答えることを課した。成果として、学生たちが協調して一つの課題を達成する能力、PCによる資料作成能力の向上、自分のテーマについて学び、さらに学術的なトピックを他人にわかりやすく説明する能力を促進したと考えられる。
(11) 学生によるアンケート調査の実施・発表	2020年4月～現在に至る	ゼミ活動の一環として、「推しと好きの違い」「恋人に求めること」等、アンケート調査のテーマを考えさせ、倫理的な問題のクリアおよび質問項目の考案・引用、form・質問紙の整備や回答の収集に至るまで調査研究の全ての工程を行った。最終的な結果の解釈や資料作成、発表については学生たち自身が行うように指導した。成果として、学生たちが自分でPCを操作する技能の向上、他者からデータを取る際の配慮やデータの扱い等の調査法についての理解を促進し、心理学的な興味の引き出しと充足に貢献したと考えられる。
(12) 授業動画のオンラインでの限定公開	2020年4月～現在に至る	コロナ禍を受け、特に講義形式の授業を画面録画し、youtubeにアップロードすることで、オンラインで適宜授業内容を参照できるようにした。欠席者のみならず受講生が授業内容を確認できるよう、必要に応じ撮影・公開を行っている。成果として、コロナ状況下での学びの確保、公欠者へのオンラインでの受講等の対応、授業内容を気軽に復習できることを可能とし、受講生全体の授業内容理解の向上につながっている。

(13) google formによる小レポート・期末レポートの提出	2020年4月～現在に至る	上記項目と同様に、コロナ禍を受け、授業内容の理解度を測るため、必要に応じてgoogle formにて小レポート、期末レポートを提出できるように対応を行った。成果として、授業内容の理解度等、数値で回答する設問を設けることにより、全体的な理解度等が即時に可視化されるため、全体の状況把握が容易になった。また、オンラインで提出記録を取ることができるため、出欠管理が容易になり、学生自身が自分の回答内容を手元に保管することが容易になった。
(14) 実習期間中の夜間オンラインミーティングによる支援	2020年4月～2024年3月	コロナ禍を受け、東京経営短期大学こども教育学科専任講師として、保育系の短大生を実習期間中に支援するため、夜20時頃から1時間程度、雑談や実習に関する相談ができる自由参加型のオンラインミーティングを企画し、その運営を毎年度主催し、全ての回に出席した。コロナ禍初期は学生の不安・要望を受けて実習期間中の平日毎日、その後は実習期間中に週1,2日程度、ミーティングを開き、有志学生・教員が参加することで実習中の相談、意見交換、休憩の場となった。成果として、実習中の学生のメンタルケアにつながり、実習の完遂に少しでも役立つ支援となったと考えられる。
(15) 事例検討型の授業	2020年4月～2024年3月	東京経営短期大学こども教育学科専任講師として、「子どもと人間関係Ⅱ（指導法）」の授業で主に行った。保育の現場で実際に起こり得る事例（例えば、噛みつき事例、後追い事例など）を提示し、それに対する返答・解決策を学生たち自身で考え、次にグループで話し合いを行い、最終的にロールプレイにて発表させる時間を取った。そのうえで、理論的な解説、保育に関する映像資料等も提示し、授業者が模範解答例を提示する形式を取った。成果として、実際に就職後の現場で起こりうるトラブルへの対処方法をロールプレイ形式で考える機会となった。
(16) 調査結果の発表動画作成	2021年4月～現在に至る	主にゼミ活動の一環として行っている。調査によって得られたデータをもとに、自分たちの研究結果について、興味のない人にもわかりやすく、端的に説明ができるよう、5分程度の動画におさめるようパワーポイントの資料を作成させ、その資料をもとに発表を行った様子を録画し、調査協力者に配信した。成果として、学生たちのデータを取るスキルのみならず、ICT技術をどう用いてプレゼンテーションをどう行うかを考える良い実践となったと考えられる。
(17) 事例検討型授業への対話型AIの活用	2023年4月～2024年3月	主に東京経営短期大学こども教育学科専任講師として取り入れた教育方法である。対話型AIのChatGPTが世界的に注目を集めており、保育に関する事例等に対する受け答えはそれなりに評価ができるものとなってきている。そのため、学生たちが実際に起こった保育上の事例に対してどのように対応すべきかわからずとも、状況を整理してAIに打ち込むことで、無制限はあるにせよ、多角的な視点から解決策・対応案を得られることが見込まれる。上記から事例検討型の授業の際、ChatGPTへの打ち込み・回答結果の紹介を必要に応じて取り入れた。成果として、学生たちが今後AIを上手く活用するきっかけにつながったと考えられる。
(18) 対話型AIの体験・レビュー動画の作成	2023年4月～2024年3月	上記と同様に、対話型AIとしてChatGPTをはじめ、様々なAI技術が日々の生活をサポートする現代において、AIの利用可能性を体験することは大きな意味を持つと思われる。そのため、東京経営短期大学こども教育学科の「専門ゼミナール」にて、学生たちに実際にPC・スマートフォン等でChatGPTに多種多様な質問・指示を与えさせ、得られた回答を検証することで、現時点でどの点で対話型AIがGoogle検索よりも利点があると考えられるか、まとめたレビューを動画形式で発表させた。成果は未知数ではあるものの、その後のゼミ学生の「保育事例への回答の見直し」への自発的なAI活用等が見られ、今後のAI利用への契機となったと考えられる。

(19) 独立リーグのプロ野球チームとのコラボ授業（実習・冠試合）	2024年4月～現在に至る	西武文理大学サービス経営学部の専任講師として、「サービス・ラーニング（スポーツマネジメント）」および「スポーツイベントⅠ（ラーニングエクスペリエンス）」の授業で他の教員3名との連携のもとに行った。2024年度は地元のプロ野球チーム（独立リーグ所属）と提携して、大学名を冠した冠試合に向け、学生は事前研修として実際の試合運営に参加した。その後、冠試合における準備・運営・撤収を主体的に担った。成果として、現場での実践を通じ、課題発見力や協働性、ホスピタリティ意識の向上が見られ、実社会と接続した学びを提供できた。
(20) 小学生向けサッカー大会の主催	2024年4月～現在に至る	西武文理大学サービス経営学部の専任講師として、「サービス・ラーニング（スポーツマネジメント）」および「スポーツイベントⅠ（ラーニングエクスペリエンス）」の授業で他の教員3名と大学職員1名との連携のもとに行った。2024年度は学園祭当日、授業の一環として地元の複数の小学生サッカーチームと連携し、試合運営を学生が主体的に実施した。成果として、企画・準備から当日の運営、対応までを経験することで、実践的なマネジメント能力や地域連携に関する理解を深める学びとなった。
(21) 毎授業での1分スピーチの導入	2024年4月～2025年3月	西武文理大学サービス経営学部の専任講師として、主に「プレゼンテーション・スキルズ」の授業で実施した。受講者のプレゼンテーション能力向上のため、毎回の授業冒頭で2名程度、それぞれ1分を目安に「最近気づいたこと」をテーマにスピーチさせた。志願と指名制を取ったため、急な指名への対応を求められることが大半であった。成果として、1人で集団に向かって話すための練習機会となり、技巧、態度、度胸、対応力などの体得につながったと考えられる。
2 作成した教科書、教材 (1) 授業内容に関する資料の作成	2013年4月～現在に至る	各種の授業に対応するため、授業に用いるテキストの他、授業者がパワーポイントにより作成した教材と教科書、映像資料、別途配布する資料を併用しながら教材の空欄を穴埋めしていくことにより、講義内容への積極的参加と知識の定着を図った。
(2) 『心理学論文解体新書（ミネルヴァ書房）』 分担執筆	2022年4月1日	心理学論文をしっかりと読んだことのない学部生向けに、どこに着目してどうまとめれば良いのか、実際の質問紙調査による心理学論文を元にレクチャーを行う「調査法」にあたる部分を執筆した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 立命館大学産業社会学部「児童・発達心理学」に関する授業アンケート結果（非常勤講師）	2018年9月	授業アンケートの結果、「学習意欲の促進」が4.1点/5点、「能動的学習度」が4.3点/5点、「学び役立ち度」が4.5点/5点と、いずれも高い評価を得た。
(2) 2021年度東京経営短期大学後期授業アンケート（単独授業のみ）結果	2022年2月	開講していた授業アンケートの結果として、「人間関係の心理学（こども教育学科・経営総合学科）」、「子どもと人間関係Ⅰ（A）・（B）」、「臨床心理学」「子ども家庭支援の心理学」「神野専門ゼミナール」の平均評価は「有用なスキルが得られた」が4.38/5点、「教員の意欲や熱意が感じられた」が4.51/5点、「友達や後輩に勧めたい」が4.37/5点と、いずれも高い評価を得た。
(3) 2022年度東京経営短期大学前期授業アンケート（単独授業のみ）結果	2022年7月	開講していた授業アンケートの結果として、「子どもとあそびⅠ」、「子どもと人間関係Ⅱ（指導法）（A/B）」、「神野専門ゼミナール」「特別演習Ⅱ」「発達心理学」「発達心理（経営総合学科）」の平均評価は「有用なスキルが得られた」が4.17/5点、「教員の意欲や熱意が感じられた」が4.50/5点、「友達や後輩に勧めたい」が4.30/5点と、いずれも高い評価を得た。

(4)Teaching Award 2022（前期）（東京経営短期大学）	2022年9月	上記記載の2022年度前期授業アンケートの結果から、Teaching Awardとして表彰を受けた。
(5)2023年度東京経営短期大学前期授業アンケート（単独授業のみ）結果	2023年8月	開講していた授業アンケートの結果として、「子どもとあそびⅠ」、「子どもと人間関係Ⅱ（指導法）」、「神野専門ゼミナール」「特別演習Ⅱ」「発達心理学」「発達心理（経営総合学科）」の平均評価は「有用なスキルが得られた」が4.49/5点、「教員の意欲や熱意が感じられた」が4.63/5点、「友達や後輩に勧めたい」が4.45/5点と、いずれも高い評価を得た。
(6)2023年度東京経営短期大学後期授業アンケート（単独授業のみ）結果	2024年2月	開講していた授業アンケートの結果として、「人間関係の心理学（こども教育学科・経営総合学科）」、「子どもと人間関係Ⅰ」、「臨床心理学」「子ども家庭支援の心理学」「神野専門ゼミナール」の平均評価は「有用なスキルが得られた」が4.34/5点、「教員の意欲や熱意が感じられた」が4.84/5点、「友達や後輩に勧めたい」が4.55/5点と、いずれも高い評価を得た。
(7)2024年度西武文理大学前期授業アンケート（単独授業のみ）結果	2024年8月	開講していた単独授業アンケートの結果として、「社会心理学」「対人関係基礎」の平均評価は「この授業での学びに満足している」が4.69/5点、「この授業はよく準備・計画されていた」が4.75/5点、「この授業を受け、更に学びを深めたいと思った」が4.54/5点など、いずれも高い評価を得た。
(8)2024年度西武文理大学後期授業アンケート（単独授業のみ）結果	2025年2月	開講していた単独授業アンケートの結果として、「心理学概論(3クラス)」「プレゼンテーション・スキルズ」「対人関係応用」「専門演習」「卒業研究」の平均評価は「この授業での学びに満足している」が4.52/5点、「この授業はよく準備・計画されていた」が4.53/5点、「この授業を受け、更に学びを深めたいと思った」が4.49/5点など、いずれも高い評価を得た。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 ○出張授業 (1)心理学における嫉妬(jealousy)研究の動向と課題（学習院女子大学） (2)発達・社会心理学（千葉県立我孫子高等学校 教員基礎コース夏季合宿） (3)心理学（クラーク記念国際高等学校 柏キャンパス 系列校体験授業） (4)心理学（クラーク記念国際高等学校 柏キャンパス 1・2年生向けガイダンス出張授業） (5)発達・社会心理学（千葉県立我孫子高等学校 教員基礎コース夏季合宿） (6)データ解析のレクチャー（オンライン）（富山大学人間発達科学部 発達臨床心理ゼミ） (7)発達・社会心理学（東京都立篠崎高等学校） (8)心理学（クラーク記念国際高等学校 柏キャンパス 系列校体験授業） (9)心理学 ストレスとそのコントロール（明聖高等学校）	2019年11月 2020年8月 2021年4月 2021年5月 2021年8月 2021年9月 2022年3月 2022年5月 2022年7月	澤田匡人准教授からのご依頼を受け、標題の内容で澤田ゼミの学生に向けて出張授業を行った。 依頼を受け、「赤ちゃんはなぜカワイイか」「はじめましての心理学」という内容で出張授業を行った。 依頼を受け、「赤ちゃんはなぜカワイイか」「仲良しの心理学」という内容で出張授業を行った。 依頼を受け、「自分を知る」「乳児を知る」という内容で出張授業を行った。 依頼を受け、「社会情動的スキルの重要性」「ストレスとそのコントロール」という内容で出張授業を行った。 近藤龍彰講師のご依頼を受け、オンライン（zoom）にて、近藤ゼミの学生に対してSPSSやAmosの使用方法や統計分析の基本的な考え方、研究目的に応じた使い分けについてレクチャーを行った。 依頼を受け、「赤ちゃんはなぜカワイイか」「仲良しの心理学」という内容で出張授業を行った。 依頼を受け、「赤ちゃんはなぜカワイイか」「仲良しの心理学」という内容で出張授業を行った。 依頼を受け、標題の内容で出張授業を行った。

(10)発達・社会心理学（千葉県立我孫子高等学校教員基礎コース夏季集中講座）	2022年8月	依頼を受け、「愛着と社会情動的スキル」という内容で出張授業を行った。
(11)心理学 はじめての心理学（東京経営短期大学ガイダンス クラーク記念国際高等学校 千葉キャンパス）	2023年3月	依頼を受け、標題の内容で出張授業を行った。
(12)心理学 ストレスとそのコントロール（クラーク記念国際高等学校 柏キャンパス 系列校体験授業）	2023年3月	依頼を受け、標題の内容で出張授業を行った。
(13)心理学「赤ちゃんはなぜカワイイの？」（神田女学園高等学校探求ゼミ体験授業）	2023年6月	依頼を受け、標題の内容で出張授業を行った。
(14)心理学 アンガーマネジメント（クラーク記念国際高等学校 柏キャンパス 系列校体験授業）	2023年6月	依頼を受け、標題の内容で出張授業を行った。
(15)発達・社会心理学（千葉県立我孫子高等学校教員基礎コース夏季集中講座）	2023年8月	依頼を受け、「赤ちゃんはなぜカワイイか・はじめての心理学」という内容で出張授業を行った。
(16)心理学「今日からできるアンガーマネジメント」（クラーク記念国際高等学校 SMARTさいたま系列校体験授業）	2023年9月	依頼を受け、標題の内容で出張授業を行った。
(17)心理学「説得の心理学」（クラーク記念国際高等学校 柏キャンパス 系列校体験授業）	2023年11月	依頼を受け、標題の内容で出張授業を行った。
(18)心理学「アサーティブ・コミュニケーション」（大学コンソーシアム市川出張授業 市川市立第一中学校院内学級）	2024年1月	依頼を受け、標題の内容で出張授業を行った。
○公開講座・市民講座等		
(1)スマホ育児を考える（（主催）東京経営短期大学（共催）大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム 市民公開講座「現代の家庭～若者と高齢者～」）	2022年11月	依頼を受け、標題の内容で公開講座を行った。
(2)令和時代のストレスとそのコントロール（いちかわ市民アカデミー講座 千葉商科大学コース）	2024年2月	依頼を受け、標題の内容で講座を行った。
5 その他		
(1)神戸大学大学院人間発達環境学研究科 学生研究支援員および教育研究支援員	2011年4月～2016年3月、2018年4月～2019年3月	当該期間において、毎週10時間、神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間発達専攻に設置されている学生共同研究室にて、非常勤の学生研究支援員として他の支援員と協同して勤務した。 学生の卒業論文、修士論文、博士論文に関わる研究計画の立案からデータ解析、さらには論文執筆にわたる研究支援を行った。 その他の業務として、諸々の学生対応、個人情報・メールリングリストの管理や連絡業務、検査用具・事務用品・電子機器その他備品の発注・会計入力・管理・トラブル対応、大学院生の出張旅費の申請作業及び管理、卒業論文発表会等の準備・運営、大学紀要の編纂・発行・送付作業、その他の各種コース運営に関わる支援業務全般に携わった。
(2)神戸大学附属住吉中学校メンタルフレンド	2011年10月～2012年10月	当該期間において、週1日、神戸大学附属住吉中学校にて、メンタルフレンドとして勤務した。他のメンタルフレンド、専属のスクールカウンセラーや養護教諭との連携のもと、スクールカウンセラーや学級担任、その他の教職員から依頼された児童の学級内・授業中の観察や休み時間の話し相手、各学級の児童の授業中の様子の観察や休み時間中の保健室での対応、保健室登校の児童の話し相手・遊び相手、養護教諭との意見交換やスクールカウンセラーへのその日の観察・ふれ合いについて気付いたことの記録・報告等、児童の学校生活に関わる支援活動に携わった。
(3)日本教育心理学会第56回総会準備委員会 学生スタッフ統括担当	2014年7月～2014年11月	当該期間に累計して300時間、学会の総会を運営する神戸大学の大学院生として、準備委員会委員長の赤木和重准教授をはじめとする教員との連携のもと、学生スタッフの公募、メールリングリストの管理や連絡業務、スタッフ用の各業務別のマニュアル作成や総会当日に向けた学生スタッフ約120名・教員スタッフ約30名全員の業務分担の考案およびシフトの作成、議事録の作成、総会当日の業務、その他各種の総会準備に必要な業務全般に携わった。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		

事項		年月日	概 要	
1 資格, 免許				
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
(1)大学コンソーシアム市川 地域マネジメント部 会員		2019年10月～2024年 3月	千葉県市川市の短大・四大が加盟する相互連携事 業「大学コンソーシアム」の東京経営短期大学教 員として, 地域マネジメント部会に所属。他大の 教職員と連携して防災備品の共同購入の検討等 を行った。	
(2)短期大学基準協会 評価員		2021年4月～2022年3 月, 2023年4月～ 2024年3月	短期大学基準協会の評価員として, 他短大の評 価員と協働して各年度につき短大1校の監査活 動を行った。	
4 その他				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 心理学論文解体新書 第3章2 調査研究 (pp. 38- 42), 第8章 調査研究のま とめ方 (pp. 123-144)	共著	2022年4月	ミネルヴァ書房	心理学論文を読んだことのない学部生向けに, 論 文の読み方・まとめ方を実践的にレクチャーする ことを目的とした著書である。 (担当項目) 調査研究についてまず概説した。次 に, 調査研究のどこに着目し, どうまとめれば良 いのか, 実際の質問紙調査による心理学論文を元 にレクチャーを行う部分を執筆した。具体的 には, 「青年期における同一性の感覚の構造 多次 元自我同一性尺度 (MEIS) の作成」(谷, 2001) と「青年の恋愛関係における嫉妬傾向は自尊感情 に規定されるか——自己愛的観点からの検討」 (神野, 2018)を教材として解説した。 (担当頁) P38～P42, P123～P144 編著: 近藤龍彰, 浅川淳司 執筆: 柳岡開地, 神野 雄, 及川智博, 榊原久直
(学術論文) 1 青年期における Eriksonの親密性と自己愛の 関連 (査読付)	単著	2012年3月	「神戸大学発達・臨床心理学研 究」第11巻, pp. 32-39.	本論文ではErikson理論に基づき親密性の獲得と ともに自己愛が低減されるのではないかとして大 学生を対象に質問紙調査を行った。相関分析およ びクラスター分析を行い, 典型的に検討した。親 密性と自己愛の両者が直線の関係にはないことが 示唆された。クラスター分析では, 「発達途上 群」「適応群」「自己愛群」が示され, それらを 比較検討すると, 自己愛の特に「過敏性」が親密 性の獲得を阻害しうる可能性が示唆された。
2 青年の恋愛関係にお ける認知的な嫉妬に関する一 研究 (査読付)	単著	2013年3月	「神戸大学発達・臨床心理学研 究」第12巻, pp. 5-12.	嫉妬の疑い深い側面を測定する尺度をPfeiffer & Wong(1989)を参考に作成することを第一の目的と し, 更にその得点が交際経験の有無等によって変 化するかどうかを検討することを第二の目的とした。大 学生208名を対象とした質問紙調査の結果, 認知的 嫉妬は, 調査協力者全体では愛着の両価性等と弱 い正の相関が見られたが, 群別に見ると違いが見 られ, 恋愛経験のない群では, より自らの不安が 嫉妬に投影される可能性が示された。
3 嫉妬研究の概観と展 望 (査読付)	単著	2015年3月	「神戸大学発達・臨床心理学研 究」第14巻, pp. 18-28.	親密な人間関係における嫉妬に関する社会心理学 的な研究の大きな流れの紹介を行うことで, 今一 度嫉妬とは何か, 検討し直すことを目的とした。 まず嫉妬の字義の整理, 妬み・羨望との異同を論 じ, 乳幼児～青年がどのような人間関係で嫉妬を 感じるか, 先行研究の知見をもとに考察した。 次に臨床心理学的視点として精神病理学・精神分 析学の観点から, そして進化心理学, 社会心理学 的観点からの研究知見を紹介し, そのプロセスや 病理性について論を試みた。

4 多次元恋愛関係嫉妬尺度の作成と信頼性・妥当性の検討（査読付）	単著	2016年6月	「パーソナリティ研究」第25巻第1号, pp. 86-88.	本論文では親密な人間関係で経験される嫉妬を多次元的に測定する尺度の作成およびその信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とした。交際経験のある大学生234名に質問紙調査を行い、結果から多次元恋愛関係嫉妬尺度は想定通りの「猜疑的認知」「排他感情」「警戒行動」の3因子構造を持つこと、また高い信頼性を有することが示された。他変数との関連の検証から妥当性の検討を行い、構成概念的妥当性が確認された。
5 架空の浮気場面への予測行動尺度の信頼性・妥当性の検討（査読付）	単著	2017年11月	「パーソナリティ研究」第26巻第2号, pp. 140-153.	本論文の目的は架空の浮気場面への予測行動尺度 Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity (ABSII) の作成とその信頼性・妥当性の検討であった。現在恋愛関係にある大学生112名に質問紙調査を行った。想定通りABSIIは「攻撃志向」「沈黙志向」「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」の5因子構造を示した。他尺度との関連から、尺度の構成概念的妥当性が概ね確認された。
6 青年の恋愛関係における嫉妬の経験と表出に関する研究	単著	2018年3月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科人間発達専攻 博士論文（未刊行）	本博士論文では、特に嫉妬深さの個人差について捉えることが可能とされる、海外で支配的な社会心理学的観点から、嫉妬の経験・表出に関して検討を行うこととした。先行研究の問題や課題を踏まえ、「嫉妬のプロセスが何によってもたらされ、何をもたらしうるか」について実証的に検討することで、個人が恋愛関係上で示す嫉妬の意味について考察することを大きな目的とした。9つの実証的研究を行い、最後の第8章で得られた知見についての考察・統合を行った。
7 青年の恋愛関係における嫉妬傾向は自尊心に規定されうるか——自己愛的観点からの検討（査読付）	単著	2018年11月	「パーソナリティ研究」第27巻第2号, pp. 125-139.	本論文の目的は先行研究で知見が一貫していない恋愛関係の中での嫉妬傾向と自尊心との関連について、自己愛に着目することで知見を整理し直すことであった。交際経験のある大学生160名に質問紙調査を行い、階層的重回帰分析において自己愛の誇大性に相当する変数を同時に投入した場合には嫉妬の情動的側面を負の方向に予測しうること、自己愛の過敏性を投入すると自尊心、自己愛の誇大性の影響力はともに減衰することが示唆された。
8 恋愛関係の嫉妬と関係満足感の関連—関係効力感とネガティブな反すうに焦点をあてた検討—	単著	2021年3月	「東京経営短期大学紀要」第29巻, pp. 11-22.	本研究では、青年が恋愛関係で示す嫉妬傾向と関係満足感との関連について、関係効力感、ネガティブな反すうに焦点をあてて実証的な検討を行った。恋愛関係にある大学生87名の質問紙調査への回答結果から、嫉妬の疑い深さに関わる認知的な側面と、「関係効力感」との関連があることにより、結果として「関係満足感」が左右されうること、またネガティブな思考を切り替えられないことも併せて「関係効力感」を左右しうることを示された。
9 保育者養成における総合表現発表会「こどもフェスタ」令和2年度報告	共著	2021年3月	「東京経営短期大学紀要」第29巻, pp. 91-104.	東京経営短期大学こども教育学科の総合表現発表会「こどもフェスタ令和2」の実践活動と経緯、保育短大の学生の振り返りから学生が何を学んだかを考察することが目的である。「こどもフェスタ令和2」では「アナと雪の女王」をテーマにした造形ワークショップや劇を行った。振り返りから、2年生の方が厳しい自己評価を行っており、「見られる」ことを意識した表現をしていた可能性が考えられた。 （本人担当：結果・考察の統計関連、全体構成（個々人の担当分は抽出不可）） （共著者：石川基子・神野雄）
10 「推し」に関する基礎的調査：「好き」と「推し」の違い	単著	2023年3月	「東京経営短期大学紀要」第31巻, pp. 91-98.	本研究では「推し」という言葉が現代の青年にどのように捉えられているか、類似の言葉として「好き」との違いに焦点を当てて探索的に検討を行った。質問紙調査の協力者71名の短大生のうち、「推し」がいる調査協力者の回答結果から、「推し」への感情は、「恋愛感情を含む『好き』」という気持ちとは直観的にも、感情の内訳としても、排他的な状態を望むかという観点でも、異なる部分があると捉えられている可能性が示唆された。

11 嫉妬傾向、架空の浮気場面への予測行動と恋愛関係上の問題行動との関連	単著	2024年3月	「東京経営短期大学紀要 第32巻, pp. 45-60.	本研究では、個人が実際の恋愛関係の中で経験しうる問題行動がどの程度、嫉妬の経験や表出を測定する尺度によって説明されるか、交際期間や性別も含めて検討することを目的とした。 現在恋人がいる大学生の調査協力者99名の階層的重回帰分析の結果から、関係における問題行動のうち、束縛的な支配行動については、嫉妬に関する尺度を投入する場合は単純な変数の主効果のみならず、性別や交互作用項による特定の条件によっても説明される可能性が見いだされた。
(その他) ○学会発表				
1 Eriksonの親密性と自己愛について	単独報告	2011年7月	日本教育心理学会第53回総会, p. 211, 北海道立道民活動センターかでる (北海道)	本研究では、自我同一性のレベルが低く、自己愛的状態だと親密性の獲得が妨げられるかという人間関係上の心理発達について検討することを目的とした。大学生208名に質問紙調査を行い、親密性尺度、多次元自我同一性尺度、自己愛人格尺度に回答を求めた。クラスター分析から、「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」からなる「中核的同一性」が未発達では自己愛的状態から脱却はできず、親密性は真には獲得されない、と発達心理学的に解釈できる。
2 新たな多次元嫉妬尺度の作成	単独報告	2013年11月	日本社会心理学会第54回大会, p. 305, 沖縄国際大学 (沖縄県)	本研究では、多次元的な嫉妬尺度のうち、広く使用されていると考えられるMJS等を参考に、「認知」、「情動」「行動」の3側面から嫉妬を捉える多次元嫉妬尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。現在、もしくは過去数年以内に恋愛関係を経験していると回答した大学生234名を対象に質問紙調査を実施した。分析の結果、多次元嫉妬尺度の信頼性と構成概念的妥当性、併存的妥当性が支持される結果が得られたといえる。
3 青年の多次元的な嫉妬と自我発達の関連	単独報告	2013年11月	日本青年心理学会第21回大会, pp. 48-49, コラッセふくしま (福島県)	本研究では現代青年が恋愛関係の中で経験する嫉妬傾向と基本的信頼感、親密性との関連を、探索的に検討することを目的とし、大学生234名に質問紙調査を行った。結果から、多次元嫉妬尺度の「認知的嫉妬」のみが「親密性」と負の関係を示し、相手を疑うことが親密な関係を阻害すること、また「認知的嫉妬」「情動的嫉妬」がともに「基本的信頼感」と負の関係を示したことから、乳児期に根差す信頼感の欠如によって嫉妬深さそのものが駆動される可能性が示唆された。
4 青年の恋愛関係における嫉妬と自己愛の関連について	単独報告	2014年11月	日本教育心理学会第56回総会, 496p, 神戸国際会議場 (兵庫県)	本研究では青年の恋愛関係における嫉妬傾向と、自己愛傾向の関連を検討することを目的とし、大学生160名を対象に質問紙調査を行った。結果から、他者の評価を過剰に気にかけ、他者からの評価に傷つきやすい過敏な自己愛傾向を持つほど、嫉妬を経験しやすいと考えられる。本研究の結果から、嫉妬傾向は多次元的に捉えても全般的に自己愛の誇大性と関連が薄く、また自己愛の過敏性や「注目・賞賛欲求」とは関連があることが示唆された。
5 嫉妬深い人ほど不満足で不安定な自己像を持つのか? — クラスター分析を用いた探索的な検討 —	単独報告	2015年3月	日本発達心理学会第26回大会, P4-006, 東京大学本郷キャンパス (東京都)	本研究の目的は、青年の嫉妬傾向と自尊感情の高低および自己像の不安定性との関係について理解することであった。交際経験のある大学生160名に対して質問紙調査を行い、自尊感情の高低や自己像の不安定性は嫉妬傾向とも直線的な関係は示しにくいこと、およびクラスター分析の結果から嫉妬を敏感に激しく経験していても恋人の裏切りを行動的に探索・予防しない場合、特に自己不満足の状態に陥る可能性が考えられた。
6 青年の関係満足感・関係重要度と嫉妬傾向の関連	単独報告	2015年10月	日本社会心理学会第56回大会, 354p, 東京女子大学 (東京都)	恋愛関係において相手に対し猜疑心を持つ者は関係に満足しない傾向にあるとされる。本研究では嫉妬傾向の各側面と関係満足感、関係重要度との関連を検討することを目的とする。現在恋人のいる大学生88名に質問紙調査を行い、結果から、本研究では海外の先行研究に部分的に一致した結果は得られたが、一方で現代日本の大学生においては少なくとも嫉妬の各側面と主観的な関係への満足感は頑健な直線的関係にはない可能性が示唆されたといえる。

7 ネガティブな反すうと嫉妬傾向が恋愛関係の質に与える影響	単独報告	2016年4月	日本発達心理学会第27回大会発表論文集, 392p, 北海道大学	恋愛関係において、相手を疑うような嫉妬傾向を持つ者は恋愛関係の質を低く評価するとされるが、嫉妬・反すう・関係満足感の関係について精査した研究は少ない。ゆえに本研究ではその点について整理を行うため、大学生88名に対し質問紙調査を行った。結果から、ネガティブな反すう傾向は認知的嫉妬に有意な正の影響を与え、認知的嫉妬と反すうのコントロール不可能性の高さがともに関係効力感を低下させる可能性が示された。
8 Personalities associated with romantic jealousy experience: considering self-esteem and narcissism in Japanese samples. (嫉妬の経験に関連する要因としての自尊感情・自己愛) (査読付)	単独報告	2016年7月	International Union of Psychological Sciences (The 31st International Congress of Psychology: ICP2016) , 191p, Pacifico Yokohama, Japan (神奈川県)	The purpose of this study was to explore the relationship among the components of romantic jealousy experience, self-esteem, and self-esteem instability by considering narcissism. Participants were 76 males and 85 females, and all of them are Japanese college students. The results showed that the components of romantic jealousy experience were not significantly related to self-esteem nor self-esteem instability. Emotional component of romantic jealousy is especially influenced by the level of narcissistic sensitivity . (本研究の目的は青年の恋愛関係における嫉妬の経験と、自尊感情、自己評価の不安定性、自己愛の関係を調べることであった。76名の男性、85名の女性の調査協力者の結果から、嫉妬の経験と自尊感情、自己評価の不安定性が明確な関連を示さず、嫉妬の情動的側面は特に自己愛の脆弱性と関わるということがわかった。)
9 嫉妬者は恋人の裏切りにどう「過剰に」反応するか？－嫉妬場面への対処行動の作成－	単独報告	2017年3月	日本発達心理学会第28回大会発表論文集, 434p, 広島国際会議場 (広島県)	葛藤に際し別れや暴力、関係修復を行う個人の違いを見出すため、先行研究を参考に嫉妬状況への対処行動尺度を作成することを目的とした。恋人のいる大学生82名に質問紙調査を行った結果として、「修復」「別れ」「非難」「忍従」「ライバル志向」の計26項目が選定された。相關結果から、嫉妬深い青年ほど「非難」「ライバル志向」「別れ」といった形で嫉妬場面に反応しやすいことが考えられる。
10 Predictors of various responses to imagined infidelity in Japanese undergraduates: examining the roles of stress and commitment to relationship. (想像された浮気への反応を予測する要因：ストレスと関係へのコミットメントについての検討) (査読付)	単独報告	2017年7月	Conference of the International Society for the Study of Individual Difference (ISSID2017), 393p, University of Warsaw, Poland (ポーランド, ワルシャワ)	The current investigation examined whether and how personal status or relational status were associated with various responses to imagined infidelity. 112 undergraduates in dating relationships completed questionnaires. The results showed that stress responses were associated with aggression and divorce, while commitment was associated with conversation positively and divorce negatively. Results also showed that silence was positively associated with commitment at low levels of stress, but negatively associated with commitment at high levels of stress. (想像した浮気への反応は、個人要因か、関係要因か、どちらにより説明されるか、質問紙調査を行った。ストレスは攻撃・別れと正の関係、コミットメントは対話と正の、攻撃と負の関係を示した。沈黙はストレスのレベルによりコミットメントと異なる関係を示した)
11 浮気場面への予測された行動の類型化の試み－嫉妬深さ・認知的評価を考慮した検討－	単独報告	2017年9月	日本パーソナリティ心理学会第26回大会発表論文集, 87p, 東北文教大学 (山形県)	恋人の浮気場面に対する行動に関して、実際に選択される反応の類型や、その背景にある要因を検討するため、本研究ではABSIIの各下位尺度得点を用いてクラスター分析を行い、嫉妬尺度や認知的評価の得点も含め検討を行った。大学生205名に質問紙調査を行った結果として、混乱群と別れ群は共に攻撃や別れへの志向性を伴うが、混乱群は関係の行く末を決めかねている群で、別れ群はその状況を対処不能で脅威と感じて別れを強く志向する群などの違いが示唆された。
12 嫉妬のプロセスは恋愛関係上の暴力加害・被害を予測するか	単独報告	2018年8月	日本パーソナリティ心理学会第27回大会発表論文集, 100p, 立命館大学 (大阪府)	嫉妬はIPVの動機の一つとして挙げられることがあるため、嫉妬の経験と表出を測定する尺度を用いて、実際の恋愛関係上の束縛・暴力の加害・被害をどの程度説明しうるか、検討することは臨床心理学的・社会心理学的研究に寄する知見をもたらすだろう。恋愛関係にある大学生99名の質問紙調査の結果から、嫉妬の経験全体と、嫉妬の表出の攻撃的な行動を予測する傾向は恋愛関係上の問題行動の加害・被害を一部予測しうるということがわかった。
13 The Effects of Investment Model and Jealousy Experience on Intimate Partner Violence Perpetration in Japanese Undergraduate Samples. (IPV加害に対する投資モデル・嫉妬の経験の効果) (査読付)	単独報告	2019年7月	Conference of the International Society for the Study of Individual Difference (ISSID2019) , p-22, University of Florence Novoli Campus, Italy (イタリア, フィレンツェ)	The purpose of this study was to investigate the effects of investment model and jealousy experience on IPV perpetration. 138 undergraduates in dating relationships completed questionnaires. Results of SEM demonstrated that relationship satisfaction and emotional dimension of jealousy experience showed direct positive effect on IPV perpetration, while investment showed indirect positive effects through multiple pathways: the cognitive and the behavioral dimensions of jealousy experience. (本研究の目的は、IPV加害に対する投資モデルと嫉妬の経験の影響を調べることであった。結果から、関係満足感と嫉妬の情動的側面は加害に直接効果を示していたのに対し、投資量は嫉妬の認知・行動的側面から間接的に加害に正の効果を示していた)

14 愛着スタイル特性と嫉妬のプロセス（嫉妬の経験・表出）の関連	単独報告	2019年8月	日本パーソナリティ心理学会第28回大会発表論文集，1-40，武蔵野美術大学（東京都）	本研究では，乳幼児期の愛着研究の基本となる3つのスタイルに準じた特性と嫉妬のプロセスとの関連を精査する。現在恋人がいる未婚の大学生99名への質問紙調査の結果から，嫉妬の経験の「猜疑的認知」は愛着の両個性に規定されうることが示された。嫉妬の表出については愛着スタイル特性と「対話」「沈黙」が明確な関連を示し，浮気という葛藤場面に際し積極的に解決を望むか，静観を決め込むかという反応の違いは，愛着スタイル特性によっても説明されうることが示された。
15 病理的自己愛は青年の恋愛関係における嫉妬傾向を促進しうるか	単独報告	2022年12月	日本パーソナリティ心理学会第31回大会，37，沖縄県市町村自治会館（沖縄県）	近年注目される病理的自己愛の特徴と他概念の関連を精査するため，恋愛関係にある未婚の大学生62名の質問紙調査結果から，嫉妬と病理的自己愛，自尊感情の関連について実証的に検討を行った。階層的重回帰分析の結果から本来的には「随伴的自尊感情」こそが情動的な嫉妬を促進しうる性質を持つこと，さらに「自己隠蔽」はむしろ嫉妬を抑制しうる部分があることが示され，病理的自己愛の脆弱な性質の全ての側面が一概に嫉妬を促進するわけではない可能性が示された。
16 「推し」への傾倒と自尊感情，自己愛の関連	単独報告	2023年10月	日本パーソナリティ心理学会第32回大会，91，金沢歌劇座（石川県）	「推し」そのものに関連する心理を取り上げた研究はまだ数少なく，基礎的なデータの収集と蓄積が求められる。「推し」を自己愛的な装置として捉えることもできるため，自尊感情，自己愛等の心理学的な変数を用いて大学生353名を調査協力者として探索的に検討を行った。女性の方が「推し」関連の出費を伴い，支えられていると感じていたが，「自尊感情」や病理的自己愛が「推し」への傾倒と直線的には関連しない方向の結果が得られた。
17 異年齢でのナナメの関係を築く「向公園あそび場」活動	共同報告	2024年6月	日本こども環境学会20周年記念大会，C-04，建築会館（東京都）	特定非営利活動法人向あそび場計画では，地域の異年齢の子どもが交流できる場である街区公園にて，異年齢児の関わり合いの中で相互の育ちあいを支援するために2018年より活動を開始している。本発表では，活動の特徴でもある学生サポーターと子供の関わりからみられる子どもの成長について紹介した。子ども集団の中に学生サポーターが加わることで，年上の子も年下の子としての立場が生まれ，ナナメの関係が複雑になり，子ども同士の相互作用が活発になることが期待される。 （本人担当：全体構成・文章の校正（個々人の担当分は抽出不可）） （共著者：石川基子・浅野俊幸・ <u>神野雄</u> ・三岳貴彦）